

1. 『風土 一人間学的考察』 和辻哲郎

人間の存在は、その取り巻く土地の歴史や風土から影響を受けている。人間の存在の仕方には、モンスーン型・砂漠型・牧場型があり、日本人の存在の仕方はモンスーン型に分類され、その中でも特殊なものとされる。広い海と豊かな日光によって、水に恵まれ植物も生茂るという点においてインドのモンスーンと共通するが、日本では変化に富む季節風によって、他国にない気候を形成している。このような日本人の、特殊な存在の仕方を三点あげて考えたい。

第一に、日本人の性格についてである。和辻によれば、日本の国民的性格は「豊かに流露する感情が変化においてひそかに持久しつつその持久的変化の各瞬間に突発性を含むこと、およびこの活発なる感情が反抗においてあきらめに沈み、突発的な昂揚の裏に俄然たるあきらめの静かさを蔵すること」に特殊性をもつ。このことから連想できるのは、「無常観」である。人生のはかなさを表すこの言葉は、日本人の感情が目まぐるしく移り変わることに、あれだけ頑張っていたにもかかわらずさらっとあきらめることができること、とつながっているように感じた。このような日本人が美德とするところは、日本人の私にとって受け入れやすいものであるが、他国の人からすれば理解しがたい考えであろう。

第二に、日本人の家族に対する考え方である。家族という全体性がある初めて、夫婦・親子・兄弟という関係が成り立つ。家族の内部では隔てなき結合が存在し、夫婦が互いに「内の人」、「家内」と呼び合うように、外部との区別に比べて、内部では個人の区別が存在しない。特に親子間では、しめやかな情愛が顕著であり、利己心を犠牲にするような感情が存在する。このような性質は、日本人の奥深くに根差されたものであるように思う。しかし、少子化・核家族・介護問題など家族関係にかかわる社会問題が多くある今日、この日本の古からの家族観を考え直してみるのはいかがだろうか。

最後に、日本人の宗教観についてである。日本人は宗教には疎い民族として有名であると考えていたが、和辻によれば、国民としての存在の仕方に全体性があり、その全体性を表すことが、宗教的な意味を持つのである。日本人の戦闘の歴史を考えれば、争いあってはいたものの、それは互いに分裂するような結果をもたらすものではなく、むしろ宗教的な結合を強固にするものであった。ここに、日本人の敵対する一方で徹底的に憎むことはしないという美德が読み取れる。この考えが、日本にしかない平和を生み出し、今なお続いているのではないかと思う。

このように日本人には特有の性質があり、日本人にしか理解できないような表現も含まれているように思う。また、この本を今日にそのまま当てはめることには無理があるだろう。しかし、それぞれの土地で異なる考え方を持つ人々が、この世界で共存していることは明らかである。国際社会に生きる私たちが大切にしなければならないことは、どのような行為や考え方が、正解か間違いか、あるいは、良いか悪いかを決めつけることではない。互いに考えて、共生する努力を続けていくことが必要である。

2. 『月と六ペンス』 モーム 訳：土屋政雄

ストリックランドという男にとって、女や恋は人生においてとるに足りない一時の出来事であり、芸術家として芸術に時間を割くことや自分一人で生きていくことの方が重要であった。しかしながら、ここではあえて、ストループとブランチを巻き込んで起こった出来事、ストリックランドにとっては取るに足りない出来事について考えたい。

ストループ夫妻の関係を引き裂いたうえに、ブランチという一人の女性が死ぬという結果をもたらしたこの出来事を通して、着目したい点がある。それは、ストリックランドという人物に対する、主人公「私」の理解である。ストループからブランチを奪ったにもかかわらず、ブランチを自殺へ追い込むという一部始終を客観的に見ていた「私」にとって、ストリックランドは嫌悪感を持つべき許せない相手である。それは、たとえば、ブランチが自殺したときに、病院でその事態に心を痛め、「今ならストリックランドを殺せるかもしれない」と思っていることから明らかである。同様に、ストリックランドと道で偶然出会ったときに、思い出したくない恐れや怒りがあふれ、嫌悪感が沸き上がったという描写からも読み取れる。しかしながら、一方で、「私」はストリックランドの言うことに対して理解も示しているのである。彼が自分に対して対等な立場でかかわってくることに楽しみを感じ、自分の性格を的確に言い当て、的を射た発言をするストリックランドを徹底的に憎むことが出来なかったのではないかと思う。そして、このような矛盾をはらんだ自分の性格によって、ストリックランドに対する苛立ちであったはずが、自分自身への苛立ちへと変化してしまったのである。ストリックランドの身勝手な性格、行動、発言に対する怒りであったものが、それを本人に伝えても意味がなく、自分の無力さがわかった時に自分への怒りになったのではないかと思う。

ここで私が思うのは、主人公「私」も試みたであろう、ストリックランドの生き方を考え分析するという行為は、無駄な骨折りに終わるものだ、ということである。他人にどう思われようと気にしない、自分のせいで一人の女性が死んでいるというのに心を痛めることもない、という彼の身勝手な生き方は、普通に社会で生きる一般的な人々にとっては理解しがたいことであると思う。

最後に、ストループに対する、「私」の思いやり、同情に着目したい。この思いやりの描写は、ストリックランドの残酷な性格が多く描かれている中で、読者に救いを与えているように感じられる。ストループが人生のはかなさを嘆き、静かに暮らしていきたいと話した時に、敢えて反論しなかったこと、そして、彼が過去を忘れて、新たな人生を歩めるように願っていることは、読者に対してさりげない安心を与えてくれるものである。

3. 『若きウェルテルの悩み』ゲーテ 訳：高橋義孝

青年ウェルテルが、婚約者アルベルトを持つロッテに恋をし、その叶わぬ恋に思い悩む姿が、細かな感情の変化までさらけ出すように描かれている。この本を通じて私が感じたことは、ウェルテルが簡単に死や自殺を考えてしまいすぎなのではないか、ということである。

確かに、ウェルテルがつらい現実を前にして、さまざまに考え、思い悩んだ末に、自殺や死という考えに行きついていることは分かる。たとえば、「世の中には、あれかこれかと片付くものは数少なく、運命だからと妥協することが難しいこともある」と考えている。アルベルトとの会話においては、「自殺をすることは人生の苦しみから逃げることであり、弱い人間がすることである」と言うアルベルトに対して、「ものごとを、愚かか賢明か、善か悪かを決めるのではなく、そのものごとには必ず前提や根拠があるはずであり、それを考えずして、ものごとを考えてはならない」と言っている。また、深く思い悩む自分に対し、気を軽く持つよう努力したり、世の中で苦しんでいるのは自分だけではないと考えたりする姿も読み取れる。このように、彼自身の中で、さまざまに葛藤を続けた結果が自殺だったのである。

ここで私が考えたいのは、どうすればウェルテルを救うことが出来ただろうか、ということである。ウェルテルの場合、手紙を書き相談できるウィルヘルムという友人を持っていた。また、宗教が多くの疲れた人にとって支えとなるものだ、という理解も持っていた。ほかには、時間が解決してくれる、という考え方もある。しかしながら、ウェルテルの場合は時間の経過とともに、さらに追い込まれていく様子が読み取れる。

そこで、ウェルテルには、自分が自殺した後に残される者の気持ち、特にロッテの気持ちへの配慮が欠けていたのではないかと思う。確かに、ロッテはウェルテルの気持ちを知っておきながらアルベルトとの生活を続けていた。これは、ロッテの至らなかつた点であり、ウェルテルに対して何か施す手があつたのではないかと思う。しかし、ウェルテルの自殺の意思を知った後、ロッテはアルベルトへの気持ちと同時に、ウェルテルへの気持ちも認めている。これは、ロッテの優しさによるものであり、客観的にみてロッテはかわいそうな存在である。自分がつらいから、自殺することで周りの人を傷つけて自分と同じような思いをしてほしい、という考えは決して肯定出来ないものである。

ここまでウェルテルの暗い部分を書いてきたが、最後に良いと思つた面を述べたい。それは、不機嫌が自分も相手も傷つけるものであり悪徳だと言っていることである。そして、人間の幸せとは、周りの人と一緒に楽しみ、相手の幸せを増やしてやることなのである。